

## 主 題：主からの祝福を忘れない 8

## 聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章9節

私たちクリスチャンは神から大変大きな祝福をいただいた者である。私たちにとって大切なことはそのいただいた祝福をしっかりと覚えながら、感謝をもって一日一日を過ごしていくことであると、パウロはコリントの教会への手紙の中で、このクリスチャンに与えられた祝福を挙げて、彼らがそれをしっかりと覚え続けていくようにと、その願いをもって記しています。私たちは神の一方的な恵みによってこの救いに与った。ゆえに、神はご自分の所有として私たちを扱ってくださる。私たちには神から恵みと平安が与えられた。また、私たちの救いのために神は大変大きな犠牲を払ってくださった。この犠牲がなければ私たちは救いに与ることがなかった。また、ただ救いに与るだけでなく、私たちは主によって新しく造り変えられました。「古いものは過ぎ去って、すべてが新しくなった」と。そして、私たちにはそれぞれ霊的な賜物が与えられ、それをを用いるために必要な助けも与えられる。私たちは神によって用いていただけるのです。そして、私たちは愛する主にお会いするその約束を心待ちにしながら過ごすことができます。そして、前回見たのは、神が与えてくださった救いは永遠のものである、決して失われるものではないということでした。イエスにお会いする日まで、救いを神ご自身が守ってくださる。そのことが「救いの永遠堅持」であると、そのように見て来ました。この約束に立っているのです。神がくださった救いという祝福を私たちは決して失うことはありません。

「ヘブル人への手紙」の著者はこのように言っています。8：12「なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。」と、感謝だと思いませんか？また、イザヤもこのように記しています。イザヤ書43：25「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」と、神が私たちの罪を赦してくださる、その罪を記録からも消してくださると言うのです。そんな祝福に私たちは与ったのです。この神がくださった祝福を私たちは忘れてはならないのです。

今日見るのは、九つ目の祝福です。1：9に書かれています。それは「私たちは神との交わりに入れられた」ということです。1：9「神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。」

## ☆クリスチャンに与えられた祝福

## 9. 神との交わりに入れられた 1：9

この1：9の私訳は「神は真実であり、そのお方によって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに召された、招かれたのです。」となります。

## 1. 主イエス・キリストとの交わり

9節で教えられていることは、イエス・キリストを信じて救いに与ったあなたは、主イエス・キリストとの交わりに入れられた、これが神があなたに与えてくださった祝福だと言います。それがどんなにすばらしいものか？このみことばが私たちに教えてくれていますから、今からそのことをしっかりと見ていきましょう。

## 1) 「交わり」とは？

ここで使われている「交わり」ということばは、ギリシャ語で皆さんもよくご存じの「コイノニア」という名詞です。この「コイノニア」の語根になっているのは「コイノス」という形容詞です。「コイノス」は新約聖書に14回出て来ますが、その中で最良の訳語は「使徒の働き」2：44にあります。「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。」、この「共有」ということばがそれです。これがこのギリシャ語のことばがもっている意味を明確に表しています。実は、この訳は使徒4：32にも使われています。「信じた者の群れは、心と意思を一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。」と。

ですから、先ず、このことを覚えましょう。「交わり」とは「共有する」ということだと。そのように私たちは捉えるのです。私たちはいろいろな交わりを経験しますが、その「交わり」の種類について次に見てみましょう。

## 2) 「交わりの種類」とは？

(1) 兄弟姉妹との交わり：クリスチャン同志の交わりです。先に見たように、「交わり」とは「共有する」ということで、そうすると、クリスチャンが集まったときに、ただこの世の話をしたり、

いろいろな人のスキャンダルを話したりと、そんなことに時間を費やしているなら、それは神が私たちに教え

てくださった「コイノニア」ではないということです。全く無駄な時間です。そこから何も得ることがないからです。「楽しかった！」と、楽しくてもそれが私たちにとって信仰の面で何の力にもならないなら、全く虚しいものです。

ですから、私たちはこの「交わり」、「コイノニア」の意味を正しく理解することが必要です。「共有」といったとき、初代教会において彼らがしていたことは物質的なものを共有するということでした。つまり、そうして助け合っていたのです。物が無い人もある人もいるわけで、その中でみなぎ助け合っていたのです。まさにそれが「コイノニア」だった。だから、このように物質的なものを共有し合うことは聖書が教えている「交わり」なのです。同時に、内面的なものを共有することも必要です。どういうことか？私たちの喜びや悲しみや悩み、苦しみなどを共有する、それがまさに「コイノニア」です。喜ぶ者といっしょに喜んで。様々な苦しみや悩みを分かち合う、共有し合うのです。

パウロが言うように「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」（ローマ12：15）クリスチャン同志が集まったときに、それぞれの物質的な何かを自慢し合うようなら神は喜ばれません。それは「コイノニア」の目的を果たすものではありません。正直、私たちの日々の生活にはいろいろな格闘が問題が敗北があります。また、いろいろな喜びもあります。経験しているそれらのものを分かち合うのです。そして、いっしょに主を見上げていくのです。それが「コイノニア」というみことばが私たちに教えてくれることです。

**結論** : 兄弟姉妹の交わりは？

(1) **お互いの必要に応じていく** : それが物質的であろうと内面的であろうと、お互いに助け合い励まし合っていくのです。

(2) **お互いの霊的必要に応じる** : お互いの信仰の成長に努めていくということです。

今から、五つの箇所を見ていきます。

ローマ15：2「私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」 1コリント10：23「すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが有益とはかぎりません。すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが徳を高めるとはかぎりません。」

1コリント14：26「兄弟たち。では、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まる時には、それぞれの人が賛美したり、教えたり、黙示を話したり、異言を話したり、解き明かしたりします。そのすべてのことを、徳を高めるためにしなさい。」、このみことばは説明しておかなければいけません。ここに書かれていることをどの時代でも、どの場所でも、すべての教会がしなければならないということを言っているのではありません。パウロが言っているのは、こういうことをコリントの教会が行っていたということです。

そこでパウロは「あなたがたはいろいろなことをやっているけれど、そのすべてのことを徳を高めるためにしなさい。」と教えたのです。

エペソ4：29「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」

1テサロニケ5：11「ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」

ですから、「徳を高める」とか「益となる」と訳されていますが、同じギリシャ語が使われています。このギリシャ語の意味は「家を建てる」という意味です。このことばが比喩的に使われると「成長する、向上する、発達する」となります。そこでパウロは「すべてのクリスチャンは霊的に建て上げられていく、霊的に大人へと成長していく」という意味でこのことばを使っているのです。より主に似た者、より主に喜ばれる者として建て上げられていくこと、成長していくこと、それが大切だということです。

ということは、このことのために私たちクリスチャンは集まるのです。協力して、お互いの信仰が成長していくこと、お互いが信仰において大人となっていくようにと言うのです。パウロはローマ14：19で今見ている通りのことを言っています。「そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう。」、ですから、私たちは「コイノニア」、「交わり」ということを見たとき、みことばはこのように教えているのです。私たち信仰者が集まったとき、いろいろなものを共有します。物質的なものであっても内面的なものであっても、そこに集まったときに信仰者が慰められたり励まされたり、勇気づけられたりしますが、同時に、その集まりの目的はただ一つ、このことを通してお互いの信仰が成長することです。信仰者として大人になる、それが集まりの目的であると、これがみことばが教えている「コイノニア」です。

世間話をするために集まっているのではありません。この世のワイドショーでやるようないろいろな人のスキャンダルやゴシップを面白おかしく話しても、それは信仰の成長には役立たない。却って、あなたの信仰を世俗的なものにするかもしれません。

ですから、「交わり」と言ったとき、それは「兄弟姉妹たちとの交わり」ということを教えられます。

(2) 主イエス・キリストとの交わり : 同時に、9節を見ると今度は「主イエス・キリストとの交わり」があります。神との交わりです。9節でパウロが言いたいことは、私たち救いに与った者たちは主イエス・キリストとの交わりに入れられたということです。ところが、ここを見るとイエス・キリストについていろいろな説明が加えられています。パウロはここで再びイエス・キリストがだれであるのかを説明するのです。1:9「…あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。」とあり、イエスのことを「神の御子」と呼んでいます。また、ただ「主」と言わず「主イエス・キリスト」と言っています。

なぜ、このような表現を使っているのか? 「神の御子」と言ったとき、それはイエスが神だということ強調します。イエスご自身はご自分のことを「神の御子」とは言わなかった。ご自分のことを「人の子」と言われました。それはご自分が人間であることを強調したのです。「神の御子」と言ったときはこの方が神だということ強調したのです。ですから、ここでパウロが「神の御子」と言ったのは、イエスが神であること、しかも、人となられた神であることを教えるのです。

同時に、「主イエス・キリスト」を「主」と言って、この方がすべての主権者であること、すべてを支配しておられる方、神であられるお方だと言います。「イエス」も「キリスト」も「救い」という意味があります。唯一の救い主です。だから、パウロは再びこうして、イエスとはだれなのか? イエスは真の神であり、人となられた神であり、すべてを治めておられる神であり、そして、私たち人類に与えられた唯一の救い主であると言います。同時に、「私たちの主イエス・キリストとの」とあります。イエスと個人的な関係があることを明らかにしています。サタンも「神はひとりだ」と知っています。でも、救われていません。救われることもありません。世の中では「イエス・キリストはだれか? 神だ」と頭で知っている人はいるかもしれませんが。問題は、この真理を心で受け入れているかどうかです。

この箇所が私たちに教えることは、確かに、このコリントの人たちは救いに与っていました。なぜなら、彼らはイエスが神の御子であり、救い主であることを信じていたからです。だから、「私たちの…」と記しています。ということは、これは…

(1) 救いのこと = この9節が私たちに教えているこの「神との交わり、イエス・キリストとの交わり」というのは「救いのこと」だと思いませんか? 思い出していただきたいのはエデンの園のことです。創世記3章に書かれています。エデンの園において、私たち人間の祖先であるアダムとエバが罪を犯します。その後、神との関係にどのような変化が起こったのか? それまではアダムとエバは神との交わりを楽しんでいました。ところが、彼らが罪を犯した途端、あることが起こります。みことばはこう言います。「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である【主】の声を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。」(3:8)と。神の声を聞いたとき、彼らはそれを歓迎しなかったのです。神から隠れました。これが「罪」です。神を歓迎しない、神との交わりを喜ばない。その結果、彼らはエデンの園から追放されます。そして、彼らがエデンの園に入らないように、

「こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。」(3:24)とあります。「ケルビム」とは天使でしょう。神の聖さを守る天使です。もう一つの「輪を描いて回る炎の剣」とは、詳しい説明がされていませんが、剣のようにとがったその光があらゆる方向に、もしかすると神ご自身の栄光があらゆる方向に光を放ち続けている様子と見て取れますが、目的ははっきりしています。それを置くことによって、この二人がエデンの園に入って「いのちの木の実」を食べないためです。そこに入る道はもう閉ざされたのです。

ですから、このように言えます。罪がいったい人類に何をもたらしたのか? それは神との交わりを失ったことです。罪が神と人との関係を引き裂いたのです。人は罪によって神との親しい交わりを失ったのです。これまで楽しんでいた交わりを失ってしまった。しかし、救いによって、この失ってしまった神との交わりを回復させていただいた。私たちは今、この神との親しい交わりに入れられたのです。失っていた交わりを救いによって回復したと、パウロはここでそのことを教えるのです。

(2) 主との共有 = 「交わり」とは「共有すること」と見ました。兄弟姉妹が集まったときに共有し合うということでした。今度は、主イエス・キリストと私たちとの交わり、共有し合うことです。いったい、私たちは主に何を提供できますか? 何もありません。神が提供してくださるのです。神が持つ

ておられるものを私たちに提供してくださるのです。それは共有です。では、いったい神は共有として私たちに何を与えてくださるのでしょうか？

### ◎主と共有するものとは？

(1) 愛を与えてくださる : 神ご自身の愛です。完全な愛を持っておられる方がその愛を私たちに与えてくださるのです。パウロは「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」(ローマ5:5)と言いました。だから、その愛をもって愛する人へと生まれ変わったのです。そのように私たちは今願っています。神の愛をもって人を愛したい、神が愛されたように愛したいと。できているか？と問われたらできていないことばかりです。でも確かに、そうありたいと願っているのが私たちです。なぜなら、そのように生まれ変わったからです。神の愛を私たちはいただいているからです。ローマ5:5に「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」とある通りです。

(2) 永遠のいのちを与えてくださる : 神は永遠のいのちを持っておられるお方、神はいのちの源であるお方です。その神が持つておられる永遠のいのちを、私たちに提供してくださるのです。ヨハネ10:28「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」、Iヨハネ5:11「そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。」、ヨハネはこのように明確に語っています。神が私たちに与えてくれた永遠のいのちは神がわざわざ作り出したのではなく、神ご自身が持つておられるものです。なぜなら、神は永遠に存在されるお方だからです。そのいのちを私たちは救いを受けることによっていただいたのです。罪によって失ったものを改めて神からいただいたのです。

(3) 喜びを与えてくださる : 三つ目に言えるのは「喜び」です。本当の喜びをもっておられる唯一のお方がその喜びを私たちに与えてくださるのです。イエスはこのように言われました。ヨハネ15:11「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。」、主が満たしてくださる喜びは条件付きではありません。これまで私たちがイエスを知る前に経験して来た喜びではないのです。それは喜ぶときに喜び、喜ばないときには喜ばないものでした。でも、私たちがいただいた喜びはどんなときでも喜べるのです。その証拠をイエスに見たとき、主はどんなときにも喜んでおられる、そのことを知っています。私たちが主からいただいたのはその喜びです。ヨブはこんなことを言っています。

ヨブ記8:21「ついには、神は笑いをあなたの口に満たし、喜びの叫びをあなたのくちびるに満たす。」と、神が喜びをくださるのです。確かに、みことばが教えるように、神ご自身が持つておられる喜びを私たちはいただいたのですが、その喜びを持って生きることは別のことです。喜びをいただいているながら喜んでいないクリスチャンがたくさんいるのは事実です。それはその人の歩みが間違っているからです。神のみこころに沿って歩んでいるなら、神とともに歩んでいるなら主があなたを満たしてあなたを導いておられます。神があなたの歩みを喜んでおられる。それはあなたのうちにある喜びが大きく実を实らせることによって知るのです。

(4) 平安を与えてくださる : 本当の平安を持つておられるお方だからその平安を与えることができたのです。ヨハネ14:27「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」、イエスはこのように言われました。私たちはこのようにみことばを見ます。確かに、みことばは私たちに神の平安をいただいた、神の喜びをいただいたと教え、私たちはそれを聞いて学んでいます。それなのに、なぜ、喜びを持って歩んでいないのでしょうか？もっと言えば、喜びを持って歩んでいないことに疑問を感じないのはどうしてでしょう？

神はこんなにすばらしいギフトを私たちに与えてくださっています。ということは、地上にあって私たちはこの喜びをもって生きることができるし、喜び、平安を経験しながら生きることができるのです。なぜ、そのように生きないのでしょうか？考えたことがありますか？私たちは何となく神のみことばを聞いてそれで満足しているかもしれません。みことばが教えている真理は、あなたも私も救いに与っているならこのように生きていけるということです。こういう歩みができるのです。こんな日々を過ごせるのです。確かに、日々の生活において辛いこと、悲しいことがいっぱいあります。でも、その中でも私たちは喜びを持って平安を持って生きることができるのです。そんな祝福に私たちは与っているのです。

イエスの生涯を見たときに、イエスほど孤独を経験した方はいないでしょう。イエスほど迫害を経験した方、愛する者から裏切られ、失望を経験した方はいないでしょう。でも、それでもイエスの生涯に

おいて彼の心には常に平安がありました。取り乱しているイエスはいません。どこかに行って気晴らしをしていることなどありません。常に神のみこころが何かを考えたし、常に神のみこころを行うことができたし、常に自分のことより人のことを考えて歩いておられました。

このイエスの歩みと自分の歩みを比較するなら、余りにもかけ離れています。でも、神が為そうとしておられるみわざは、主が生きたように私たちも生きることができるということです。神の平安をもって生きることが出来るのです。ですから、みことばは繰り返すのです。「心を騒がせるな、恐れてはならない」と。私たちは神の平安をもって生きるのです。あなたが見なければいけないのは「神」です。あなたが立たなければいけないのは人の知恵、人の力ではない、神のことばであり神の力です。

神がこのように言うておられるから私たちはそのように生きることができるのです。みことばはあなたの重荷にはなりません。重荷にすることはできます。でも、みことばは私たちに希望をくれます。みことばを見るときに、主の約束を見るときに、主はこのようなことがあなたには可能だと言っているのです。それは希望になりませんか？救いに与ってただ罪を赦されただけではない、私たちは神の喜びをもって今日を生きることが出来るし、神の平安をもって今この状況の中で生きていくことができるのです。これは希望です。私たちの信仰を鼓舞しませんか？みことばとはそういうものです。私たちの信仰を励ましてくれます。私たちに勇気をくれます。希望をくれます。神はこのような人へと私たちを造り変えようとしてくださっているのです。しかも、もうそのように造り変えてくださったのです。問題は成長するかどうかです。

平安について他のみことばを見ましょう。詩篇 29 : 11 「【主】は、ご自身の民に力をお与えになる。

【主】は、平安をもって、ご自身の民を祝福される。」、ヨハネ 16 : 33 「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」、ヨハネ 20 : 19 「その日、すなわち週の初めの日の夕方のであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」、ヨハネ 20 : 21、26 「:21 イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」、:26 八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように」と言われた。」

主は私たちに神の愛をくださり、彼のいのちをくださり、彼の喜び、平安をくださった。

(5) 必要を与えてくださる : 5番目に、すべてのものを所有しておられる神が約束されたのは「このわたしがあなたの必要を満たす」です。だから、私たちはこの地上にあっていろいろな必要を覚えますが、感謝なことに、神がともにいて必要を満たしてくださるのです。確かに、私たちはいろいろな金銭的なことで心配することがあるかもしれませんが。皆さんこう思いませんか？それはすべて、神がご自身のみわざをなされる機会だと。余りにも、私たちが神に対して過保護的に扱ってしまっ「神さま、そういうことを為さなくても大丈夫です！」と言いますが、神はご自身の御栄えを現わすのです。神はご自身の御力を現わすのです。そうしてご自分がどんなに優れた神であることを明らかにさせる。我々はその機会を奪ってはいけません。

では、どうすればいいのか？神のみことばを信じて、この約束に立つのです。神は必要を満たしてくださる、もうそれで十分です。我々はそれを信じて生きるのです。なぜなら、神には不足している部分がないからです。詩篇のみことば、50 : 10 「森のすべての獣は、わたしのもの、千の丘の家畜らも。」、「この世のすべてのものはわたしのもの、この世のすべてのものはわたしが支配している」ということです。そのすべてのものを持っておられるお方があなたや私の必要をくださるのです。

皆さん、神がこのようなお方だということをこの世に証していくのはあなたであり教会です。恐らく、その証を皆さんに尋ねたら、皆さんはもう何度も経験されているゆえに証してくださるでしょう。私たちはそうするのです。主は言われたことを必ず守っていかれます。必要を満たしてくださるのです。すべてを持っておられるこのお方が、そのご自身の富に基づいて私たちに必要なものをくださるのです。

ピリピ 4 : 19 「また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます。また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます。」と、まさに、この通りです。

(6) 慰めを与えてくださる : どんな人をも慰めることが出来るお方が慰めをくださる。イザヤ書 51 : 12 「わたし、このわたしが、あなたがたを慰める。あなたは、何者なのか。死ななければならない人間や、草にも等しい人の子を恐れるとは。」、66 : 13 「母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰め、エルサレムであなたがたは慰められる。」、母親を引き合いに出して、母が慰めてくれるように神であ

る主があなたを慰めてくれると言います。また、Ⅱコリント1：4「神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。」、7：6「しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちが慰めてくださいました。」、気落ちした者を慰めてくださるのです、神は…。あなたがどんな思いを持っているのか、あなたが今どのような状況にいるのかをちゃんと神はご存じでありあなたを慰めてくださる。もちろん、いろんな方法を使って神は慰めをなさいます。この場合はテトスを送るということによって慰めを与えられました。神はいろいろな方法を使ってあなたを慰めてくださいます。それは皆さんも経験して来られたでしょう。

神が持つておられるものを私たちと共有してくださる。本当に私たちが慰めることのお出来になる方がその慰めを共有してくれる。私たちはそれを経験しながら歩むことができるのです。

(7) 励ましを与えてくださる： もう一つ、どんな人をも励ますことのお出来の方が私たちに励ましをくださる。ローマ書15：5には「どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようになさいますように。」とあります。私たちに対して大変な忍耐をもっておられ、同時に、この方は私たちが励まし続けてくださるお方です。申命記31：6には「強くあれ。雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、【主】ご自身が、あなたとともに進まれるからだ。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」とあります。恐れることはないのです。自分の弱さを認めて神に助けを求めることです。

皆さん、すごい祝福を私たちはいただいていることにお気づきになりませんか？「神との交わり」と言った時に、ただお祈りが出来るといった次元のことではありませんでした。それもすばらしいことです。私たちは祈りをもって神を誉め称えます。しかし、私たちの信仰というのは「神の約束に立って生きる」のです。なぜなら、私たちの信仰がどんなに熱心でも真理に基づいていなければ、それは神を喜ばせるものではありません。そういう人たちがたくさんいたのです。確かに熱心です。でも悲しいことに、その熱心は神のことばである真理に基づいていなかった。だから、私たちがすることは真理を知ることです。そして、熱心であることです。

私たちはこうしてみことばを見る時に、このような約束を神は私たちにくださった。ですから、この約束をいただいた者として、その約束をしっかり覚えて感謝を持って生きることです。「これが私たちに与えられた主からの約束である」と。この世の人たちが自分の知恵や力では絶対に得ることのない祝福を私たちはいただいで歩むことができます。「主との交わりに入れられた」と、そこにはこんな約束が伴っているのです。

## 2. 交わりへの主の招き

続いて見ていきましょう。今日のテキスト、Ⅰコリント1：9に戻って「神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。」、ここに「その方のお召しによって、」とあります。このすばらしい神との交わりにあなたが入れられたのは、あなたの行ないではない、すべて「神の召し」によるのだとパウロは言うのです。つまり、神のみわざによってこの祝福に与ったということを教えるのです。ローマ書8章を開いてください。8：30「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」と、私たちがかつて学んだところです。

### 1) 「召し」

この「召し」とは「呼び出す」ということです。罪の中にいたあなたをそこから呼び出してくださった。なぜ、そのような働きが救いには必要かと言うと、私たちはみな、生まれながら霊的に盲目であったから、神のことを聞いても理解できない、救いのことを聞いても他人のことと思ってしまう。全く霊的なことを理解できない私たちだったからです。だから、神の働きが必要なのです。そして、みことばはそのことを我々に教えるのです。神があなたのうちに働いてくださって、そして、神ご自身が罪の深みにいたあなたを名指しで呼び出してくださった。これが「救い」なのです。Ⅱテモテ1：9を見てください。今、私たちが見ていることをパウロは非常に明確に教えています。「神は私たちが救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、」と、神が一方的に働いてあなたを罪から救い出してくださった。しかも、この恵みのみわざを神は世界を造る前から決めておられた。これが「救い」なのです。突然、神はひらめいて「じゃ、この人を救ってあげよう…」なんて、そんな神ではありません。あなたが救いに与っているのは、神がこの世界を造る前からあなたを救おうと決めておられたのです。そして、神があなたを名指しで罪から呼んでくれたのです。これが「召し」なのです。私たちがこのローマ書を学んだ時に、まさに、これは「有効召命」だと学びました。神学的な名称ですが、神が召してくださりその招きに私たちが応じたということなのです。

## 2) 「義」

ローマ書 8 : 30を見ると「召した人々をさらに義と認め、」と続きます。神がそのように認めてくださった、神が義なる者、正しい者と認めてくださった。神が「この人は聖い」とそのように宣言してくださったということです。だから、私たちはこの聖い神の前に立つことが赦されているのです。

私たちは自分自身を見た時に、自分の心の中が罪だらけで罪に汚れていることを知っています。なぜ、罪に汚れているこんな私がこの聖い神の前に立つことができるのか？その答えは神があなたを「義なる者」と宣言してくださったからです。だから立てるのです。もし、神が「あなたはすべての考えや行ないにおいて罪から100%離れたらわたしの前に立てます」と言われたなら、私たちは絶対に立つことが出来ません。でも、神がイエスを信じたあなたや私を義なる者と宣言してくださった、だから、立てるのです。

## 3) 「栄光」

「義なる者」と宣言された者としてこの神の前に立つことができるのですが、私たちは日々の生活において罪との葛藤を経験しています。だから、私たちはこの罪から解放されるその日を待っているのです。ですから、このローマ書 8 : 30はこう続きます。「義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」と。そのことがもう約束されているのです。栄光のからだを私たちはいただくのです。私たちの心はもう変えられたのです。この罪のからだだけが変えられていないのです。ですから、栄光のからだをいただくのです。その日を待っているのです。

この箇所では「…栄光をお与えになるでしょう」とは書かずに「…お与えになりました」と不定過去形で書かれています。もうすでにそのことが起こった出来事かのように書いています。これはこの出来事が必ず起こることを意味するのです。確かに、未来のことであっても確実に起こることなので、敢えてこの時制を使って書いているのです。意図的にこの時制を使うのです。「そうあればいいな…」という希望ではありません。パウロが言っているのは「必ず、間違いなく、絶対このようになる」です。

ピリピ 3 : 21に「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」とパウロが記している通りです。あなたも私も救いに与っている者たちは栄光のからだへと変えられるのです。救いというのは神のみわざです。神が一方的にあなたを選んでくださり、あなたをこの救いへと招いてくださり、あなたを義なる者、聖なる者と宣言してくださり、そして、あなたに栄光のからだを約束してくださったのです。

## 3. 祝福の保証

パウロはこうして私たちに「主イエス・キリストとの交わりに入れられた」というすばらしい祝福を教えました。私たちは「救い」という祝福に与ったのですが、それは100%神の召しであった、神のみわざであったと言います。そのことをパウロはもう一度1コリント 1 : 9に記していますが、最初のことばをご覧ください。「神は真実であり、」とあります。つまり、この約束が真実で信じる事が出来るということと言います。なぜ、そう言い切れるのか？日本語では「神は真実であり」と書かれています。でも原語では「真実」という形容詞があって、その後「神は」と続くのです。このような書き方を意図的にするのは何を強調したいのかを読者たちにはっきり伝えるためです。パウロは「真実」ということ、その真実は神の真実ですが、その真実を強調したかったのです。これこそが神のご性質であると。神は真実なお方であって、つまり、神は約束されたことを100%間違いなく守られるお方だと言うのです。

皆さん、こうして9番目の祝福を見て来ました。あなたは神と特別な交わりの中に入れられた。それはどういう意味なのか、どんな祝福を伴うのかを見て来ました。そして、これはただの淡い希望ではないのです。もう、あなたに与えられた神からの祝福なのです。あなたに与えられたこの祝福が偽りでないこと、また、あなたはこのすばらしい祝福を失うことがないのだと、その証拠としてパウロが言いたかったことが「神は真実なお方である」ということです。

申命記 32 : 4「主は岩。主のみわざは完全。まことに、主の道はみな正しい。主は真実の神で、偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。」、みことばははっきりと神がどんなお方であるかを教えています。「主は真実の神で、偽りがなく、正しい方、」と、この方が言われたことは必ず成るのです。また、同じ申命記 7 : 9「あなたは知っているのだ。あなたの神、【主】だけが神であり、誠実な神である。主を愛し、主の命令を守る者には恵みの契約を千代までも守られるが、」、「誠実」とは「信頼できる」ということです。感謝だと思いませんか？ 私たちの神は私たち信じる者に対して必ずそれを実現されるのです。何となく信じて、それによってそれを自分の心の支えにするのとは違うのです。私たちの神は言われたことを確実に為さるのです。歴史がそれを証明して来ました。その同じ神があなたの神であり私の神なのです。

なぜ、私たちはこういう祝福を確信をもって自分に与えられていると言えるのでしょうか？完全な神だから「与える」と約束された祝福は完全なものです。永遠の神だから「与える」と約束された祝福は永遠のものです。真実な神だから「与えられた祝福は必ず与えられる」のです。

**結論** 皆さん、私たちクリスチャンというのは、確かに最も幸せな者だと言えませんか！最も幸せな者、なぜなら、こんな祝福を神からいただいたからです。あなたは感謝しておられますか？神からの祝福をいただいた者として、それにふさわしく歩んでおられるでしょうか？

なぜ、私たちはこれらの祝福を忘れてはいけないのか？こういう祝福を与えられた、大変な犠牲に基づいて与えられたと、そのことを知っている者たちは、それにどう答えていくのかを考えるからです。忘れてしまったら、その日その日をただ自分の思いのままに生きるかもしれません。私たち信仰者は、このすばらしい祝福を覚えることによって、一日一日、自分自身に問いかけるのです。この祝福に与った私はこの主に対してどのように生きていくのか、どのようにして私の感謝を現わしていくのかと。

この質問に私たちは答えなければいけません。日々何度でも、その質問を問いかけながら、私たちはその質問に答えなければいけません。信仰者の皆さん、感謝を持って生きていきましょう。私たちにこんな祝福をくださったのです。それにふさわしく生きていきましょう。そのように生きていくことが出来るのです。神がもうその祝福を十分に備えてくださったからです。

詩篇 116 : 12、13 「12 主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は【主】に何をお返ししようか。:13 私は救いの杯をかかげ、【主】の御名を呼び求めよう。」

この新しい1週間、恵みをしっかり覚えて、その主を心から感謝して喜んで、この方のすばらしさを伝える器としてそれぞれが歩んでいかれることを願います。そうして、私たちの感謝を現わしていきましょう。まさに、それがふさわしい生き方です。

#### ☆ 主からいただいた祝福 I コリント 1 : 1-9

1. 主の恵みをいただいた 1 節
2. 主の所有とされた 2 節
3. 神から恵みと平安をいただいた 3 節
4. 救い、主の大きな犠牲によって救われた 4 節
5. 主の豊かさをいただいた 5 節
6. 霊的賜物が与えられた 7 a 節
7. 再臨の約束 7 b 節
8. 救いの保証 8 節
9. 神との交わりに入れられた 9 節